

津波避難情報システム ～ゆりあげ港朝市（宮城県名取市）での社会実験実施～

2011年3月11日、閑上漁港付近でおよそ8.5メートルに達する津波が押し寄せ大きな犠牲を出した宮城県名取市ゆりあげ地区。日曜・祝日には「ゆりあげ港朝市」が開かれており、約50の店舗が新鮮な海の幸や地場産品の野菜などを提供、かつての活気を取り戻しつつあります。

その「ゆりあげ港朝市」の会場で9月28日午後、津波避難情報システムの社会実験が行われました。

この実験は、同協同組合の組合員や買い物客の皆さんら約80人が参加して行われたもので、開発者の一人、東京大学地震研究所 巨大地震津波災害予測研究センターの堀宗朗教授が開発の目的を紹介、続いて挨拶にたった組合長の櫻井広行さんは「最近の訓練を見ていると、予定通りの内容を消化して終わりで形骸化しているケースが多い」などと述べ、本実験への期待を示しました。

実験は、マグニチュード8の地震、予想される津波の高さ3メートルという想定で行われ、緊急地震速報、津波警報などのメールが登録者に配信されると、参加した人たちはスマートフォンを手に、一つ一つ情報を確認しながら操作したり、また、中には、近くの高さ7メートルほどの日和山まで実際に避難した人もいました。

参加した人の中には、スマートフォンを普段あまり使っていない人もいましたが、未曾有の災害を経験しているだけあって皆さん真剣な表情で訓練に臨んでいました。



朝市の風景



更地状態のゆりあげ港前



実験説明に聞き入る参加者の皆さん



社会実験受付風景